

令和 7 年度
東京都現代美術館美術資料収蔵委員会
コレクション部会

令和 8 年 2 月 3 日（火）

東京都現代美術館

午前 9 時 58 分開会

大石文化施設担当課長代理：それでは、定刻前ではございますが、皆さんおそろいでございますので、始めさせていただきますと思います。

本日はお忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。

ただいまから令和 7 年度東京都現代美術館美術資料収蔵委員会コレクション部会を開催いたします。

私は、東京都生活文化局文化振興部文化施設担当の課長代理の大石と申します。議事に入るまで司会を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、東京都生活文化局文化施設・連携推進担当部長の杉山から御挨拶を申し上げます。

杉山文化施設・連携推進担当部長：おはようございます。

改めまして、文化施設・連携推進担当部長の杉山と申します。よろしくお願いいたします。

本日はお忙しい中、足をお運びいただきまして誠にありがとうございます。

当館は日本を代表する現代アートの美術館として、体系的に国内外の美術作品を収集・保管して、多彩な分野で創作活動を積極的に取り上げることで、常設展示の一層の充実を目指しております。

本日御提案いたします作品資料につきましては、当館に収蔵する資料としてふさわしいものであるかどうか、ぜひ皆様の専門的な観点から忌憚のない御意見をいただければと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

大石文化施設担当課長代理： 続きまして、本日御出席いただきました委員の皆様を御紹介させていただきます。

私から向かって左の席から順に御紹介させていただきます。

青野委員でございます。

続きまして、大谷委員でございます。

続きまして、児島委員でございます。

続きまして、富田委員でございます。

続きまして、出原委員でございます。

沼田委員は事前に御欠席との御連絡をいただいております。

続きまして、事務局職員を御紹介いたします。

東京都現代美術館副館長の渡邊でございます。

同じく東京都現代美術館事業企画課長の關次でございます。

同じく東京都現代美術館調整課長の飯田でございます。

同じく東京都現代美術館事業係長の石川でございます。

次に、お手元の資料の御確認をお願いいたします。

一番上にごございますのが会議次第、そして資料 1 「東京都現代美術館美術資料収蔵委員

会コレクション部会委員名簿」、資料2「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱」、資料3「東京都現代美術館美術資料収集方針」、資料4「令和7年度東京都現代美術館収集候補作品一覧表」、資料5「作家・作品説明書」、それからコレクション部会評価表をお配りしております。よろしいでしょうか。

また、お手元の資料につきましては、現時点で未公開の情報がございますので、会議終了後、回収させていただきます。

それでは、議事に入る前に、委員長を選任をお願いしたいと思います。当部会の委員長は、「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱」第8の規定により、委員による互選で定めることとなっております。いかがでしょうか。

児島委員：よろしいでしょうか。富田委員を委員長に推薦したいと思いますのですが、いかがでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

大石文化施設担当課長代理：ただいま、委員長に富田委員を推薦いただきまして、異議なしということでございますので、委員長は富田委員をお願いしたいと思います。

富田委員長：皆様の御推薦により、本会の委員長を務めさせていただきます富田でございます。

円滑な議事進行に御協力いただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

では、早速議事に入りたいと思います。

まず、部会の公開について、事務局より説明をお願いいたします。

大石文化施設担当課長代理：当部会は、「東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱」第10の規定により、原則公開となっております。

しかし、資料収集決定前の段階で対象資料の詳細を公開することにより、現在の資料所有者に不利益を生じさせるおそれがあること、また、資料の現物確認については所有者から参考用に借用していることから、本日の段階では議事内容は非公開とすることが適当と考えます。

なお、当部会の議事録については、同要綱第10第2項の定めに基づき、資料収集決定の後、公開を予定しています。公開に当たって、委員の皆様には追って内容の確認をさせていただきます。また、委員の皆様のお名前と現職名は、東京都ホームページ上にて公開しております。

議事内容を非公開とするには、同要綱第10第1項（2）及び第2項（2）の規定により、部会での決定が必要になります。このことについて、事務局といたしましては、委員の皆様にお諮りいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

富田委員長：それでは、コレクション部会の公開の是非についてお諮りします。

事務局から本日の段階での議事内容は非公開が適当との意見がございましたが、委員の皆様、いかがでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

富田委員長：特に異議がないようですので、ここから先の本部会の議事内容は非公開とさせていただきます。

では、事務局から資料の御説明をお願いいたします。

關次事業企画課長：事業企画課長の關次でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

令和7年度東京都現代美術館作品・資料の収集概要について御説明申し上げます。

なお、個別の作品の詳細につきましては、この後の作品の実見がございますので、その際に、担当学芸員より御説明申し上げます。まずはお手元の資料4及び5を御覧ください。

今年度皆様にお諮りする作品・資料は、購入作品が11作家による27作品。そして、寄贈作品は、購入に伴う寄贈作品も含め17作家による計119点でございます。

購入作家には、資料に記載のとおり、斉藤陽子さん、岡崎乾二郎さん、伊藤誠さんをはじめとする11作家となっております。

なお、収蔵に当たっては、当館の「収集の基本方針」に基づき、首都東京の現代美術館にふさわしい作品を館を挙げて精査いたしました。なお、選定における中心的な視点は、まず当館のコレクションを体系的、そして歴史的変遷を網羅する重要な作品であること、そして作家研究のさらなる深化、これを進める作品であること、そして公開すること、コレクション展示への有効性、なお、現在の市場動向を鑑みた優先順位などが上げられると存じます。

これらを踏まえ、今年度の収蔵における重点なポイントをさらに御説明したいと思えます。

なお、まず第1は新進・若手作家の支援や育成、そしてフォローアップについてでございます。これは当館の重要なミッションの一つとなっております。継続的な調査に基づき、時宜を捉えて選出した高橋大輔さん、益永梢子さん、那須佐和子さんらの作品、そして近年の展覧会を契機とした「MOTアニュアル展」に御出品いただいた庄司朝美さんや臼井良平さん、そして今年度の30周年記念展「日常のコレオ展」に出品いただきました上原沙也加、これらの作品が新進作家育成のフォローアップに当たると存じます。

そして、東京都現代美術館のコレクションの体系化、そして美術史的文脈のさらなる補完ということで、今回も多く優れた作品の御寄贈を受けることができました。今回の御寄贈作品は購入に伴う寄贈もございますが、多くは当館の日頃の学芸員の調査、そして所蔵者との信頼関係によって収蔵がかなった作品群と言えます。将来のコレクション展での活用を見据え、今回は伊藤誠さん、菅木志雄さん、山田正亮さん、福田尚代さんら、日本を代表する重要な作品をラインナップしております。

そして、最後に戦後世代の女性パイオニア作家の重点的な収集にも今回付議させていただいております。今回、斉藤陽子さんの作品を購入作品として付議させていただいております。前衛芸術運動「フルクサス」で活動したほか、参加型アートの先駆者として、国際的に活躍し、昨年9月に96歳で御逝去された斉藤さんの作品となっております。

なお、今回収蔵委員会では斉藤氏の作品につきましては、あらかじめデータでお送りして

いますとおり、本日の会場では作品の実見がございません。あらかじめ御了承くださいませ。この斉藤作品についての詳細については、事業係長の石川より御説明させていただきますと存じます。

では、石川係長、御説明をお願いします。

石川事業係長：それでは、候補作品の概略を御説明させていただきます。お手元の資料4と5、それぞれ購入と寄贈に分かれておりますので、そちらを併せて御覧ください。同じ作家の寄贈作品がある場合は、順番が前後いたしますが、寄贈分も同じ作家と一緒に御説明させていただきます。

では、まず最初に購入作品の1番、斉藤陽子の作品です。当館では初めての収蔵の作家となります。1929年生まれで、日本女子大学で児童心理学を学んだ後に教師となり、美術教育運動「創造美育運動」に参加した後にニューヨークへ渡航して、それを機にフルクサスに参加。1979年からはドイツのデュッセルドルフに定住して長らくドイツを拠点に活動しておりました。パイオニア世代の女性作家として収集に向けて調査と交渉を進めてきましたが、残念ながらその途中の昨年9月に96歳でお亡くなりになってしまいました。そのため、様々な事情ですぐに作品を動かすことができなかったため、委員の皆様には事前に資料で共有させていただきましたが、今回は資料での付議により決定を受けて、年度内に決定の後にドイツから美術館に納品するという流れになりますので、少し長めに詳細を説明させていただきます。

事前にお送りした資料に関しては、後ほど実見のときに改めて同じ資料を基に御説明をさせていただきますと思います。

1番の作品、出店のような形態の作品で、作家が売り子、鑑賞者が客として参加してもらうことを作品とした斉藤の代表的なシリーズ「ユー・アンド・ミー・ショップ」の流れを受けて2002年に制作された「Takako's Book Shop」という作品です。高さ2.2メートルの木のパネルの上に日よけがついて、その下にデスクが置かれるという形態になっておりまして、斉藤がドイツに定住後、自身の紙作品をまとめたオブジェ「ブック」シリーズが壁面や上からぶら下がっており、店の商品のように展示されているという作品です。

2番の作品に関しましても、斉藤の大きな要素である遊びを取り入れた「Games」というオフセットのプリントとオリジナルのドローイングを含んだ作品になります。自ら主宰したプライベートエディションである「ヌードル・エディション」で制作された7点組のエディションにフォルダー1点、オリジナルドローイング1点がセットになったものになります。遊びやゲームといった斉藤にとって作品の重要要素が組み込まれた誰でも参加できる場としてのアートを実現した作品であり、プリントにはゲームの指示などが書かれています。斉藤の作品は長らく海外を拠点としていたことも一つの要因であると思いますが、国内では収蔵する美術館が少なく、今回の収蔵を機に研究を進め、その成果としての展示活用が大いに見込まれる貴重な作品となっております。

続きまして3番、岡崎乾二郎は既に収蔵されている作家となります。本年度当館で開催

した個展の出品作となります。彫刻は岡崎にとって初期から造形の志向の中心であり続けていましたが、90年代に絵画へと移り、30年ほどの月日を経て2021年に患った脳梗塞からの回復期の最も大きな挑戦として制作された彫刻群のうちの一つです。

同じく4番と5番、こちらも当館での個展に出品された0号カンヴァスの作品2点、2000年代半ばに始まった岡崎の重要シリーズになっております。当館収蔵作品が80年代後半から2000年代初頭の作品になりますので、時代的にも当館のコレクションを補完する作品にもなります。

続きまして、6番から10番、伊藤誠は当館では新収蔵の作家となります。1955年生まれで80年代に活動を始めた作家です。先行する世代の成果を背景に彫刻が延伸的に拡張していった中で様々な試行錯誤を行い、彫刻の体験を問う作品を制作してきています。今回候補に挙げさせていただいているのは、ステンレスメッシュを使った作品、FRPを用いた作品など表現に合わせて様々な素材を用いた、その中でも代表作と言える作品です。

そして、寄贈の21番のほうにも伊藤の作品がありますが、こちらと購入、前後しましたが、9番、10番、そして寄贈が21番、こちらの3点は「BOAT」というシリーズからの作品となります。こちら装着型の作品で上の面が鏡のようになっており、それを目の下につけると眼下に天井が映し出されるという、身体感覚と視覚に変化を及ぼすような作品となっております。

続きまして11番、11番の笹本晃は当館新収蔵で、今年度当館で個展を開催したミッドキャリアの作家となります。2010年に発表された初期の代表作「Strange Attractors」を当館での個展会期中に複数回パフォーマンスを行いまして、そのうちのひとつのパフォーマンスで描かれた作品になります。作家がダイアグラムと呼ぶパフォーマンス中に即興的に描くドローイングで、パフォーマンスを主とした表現とする作家にとっては、パフォーマンスの成果とも言える作品になります。

また、今回の個展のために個人のコレクターの方から借用した作品1点と、同じコレクターの方から寄贈のお申出があった作品、それぞれ99番の作品も候補とさせていただいております。

続きまして、12番から17番、益永梢子、こちらも新収蔵の作家で、購入4点に加え寄贈3点がございます。1980年生まれの作家で、カンヴァスを起点に紙や布など多様な素材を用いて空間との関係性を考察する作品を制作しております。2013年の初期の代表作から2025年までの作家のキャリアの中でも代表的な作品をピックアップしております。また、併せて寄贈の101から103番、こちらの作品も候補として挙げさせていただいております。

続きまして16番、17番、高橋大輔、こちらも新収蔵で、1980年生まれの作家です。絵の具を幾重にも重ねる厚塗りの作品を多く制作してきた作家ですが、その中でも2025年、昨年の個展で発表された作品群を候補として挙げさせていただいております。絵画の可能性について一貫して追求してきた作家が、この近作によって様々な変遷の中で行き着いた一つのマイルストーンとしての作品として重要なシリーズとしていることから、この世代の

動向を示し得るものとして重要な作品群と判断しました。

また、併せて寄贈の104番、こちらと同じ個展で発表された作品を寄贈していただいております。

続きまして、購入の18、19番、ユアサエボシです。こちらの作家は昨年度もコラージュの作品を収蔵した作家ですが、ただいま開催中の「MOTコレクション」に合わせて作品を借用し、今、展示中の作品を候補として新たに挙げさせていただいております。大正生まれの架空の画家ユアサエボシが描いた作品というユーモアあふれるコンセプトで、今回は対称の構図となっている2点の絵画を候補として挙げております。従来の美術史や過去の視点の再考などを試みた作品によって、当館の既収蔵の作品を補うだけではなくて、ほかのコレクションとの組合せなど様々な活用が考えられる作品です。

続きまして20番、臼井良平は、こちらにも新収蔵となります。昨年度開催の「MOTアニュアル2024」の出展作家で、その出品作品「Fence」、そちらのサイズが大きかったもののリサイズバージョン、幅3.6メートルにリサイズしたバージョンになります。フェンスの網目に作家によってつくられたガラスのペットボトルとスーパーボールを挟み、ガラスで制作されたバッククロージャーも配置しているという作品になっております。プラスチックの製品をガラスによって精緻に再現して、日常の光景を切り取るというシリーズを手がけてきた臼井にとっての代表作に位置づけられます。

続きまして21番、庄司朝美、こちらにも同じく新収蔵で「MOTアニュアル2024」の出展作家です。こちらの作品は「MOTアニュアル」の展示作品の中でも最も大型の作品で、これまでの作家のキャリアの中でも最大規模の作品となっております。絵の具を拭き取ったり引っかいたりするという行為を重ねて人物や動物、骸骨などが交錯するような作品になっております。1988年生まれと若手の作家であり、当館が近年重点的に収集してきた国内の新進作家の絵画作品に連なる作家として今後の幅広い活動が期待されております。

寄贈の109番、こちらにも同じく庄司の「MOTアニュアル」の出品作を寄贈の候補として挙げさせていただいております。

続きまして、22番から26番、上原沙也加は、こちらにも新収蔵の作家になります。今年度開催した30周年記念展「日常のコレオ」展の出品作で、彼女の代表的シリーズの「眠る木」を中心として「日常のコレオ」展のために構成された作品群の一部を収集候補とさせていただいております。彼女は1993年沖縄生まれの若手の作家で、作家自身の生活と地続きの場としての沖縄を捉え直すということで、同時代を生きる私たちの今という感覚を共有し得る作品として候補に挙げさせていただいております。

寄贈の119番にも同じ出品作シリーズの中から1点を寄贈として挙げさせていただいております。

続いて27番、那須佐和子、こちらにも新収蔵で、今回の候補の中では最も若手となる1996年生まれの作家になります。今、資料のほうでは画像では非常に分かりにくい作品となっておりますが、上下で分かれているように見える部分が、同じメーカーで経年時間が違う異

なったカンヴァスを用いて絵の具をカンヴァスに塗り込めて削って洗い流すという工程を何度も繰り返して制作された作品です。1つの画面の中でしわや折れや傷など複数の要素を組み合わせることで形づくられています。こちら後ほど実作品で御確認いただければと思います。

続きまして、ここからは寄贈のみの作品となっております。

寄贈のほうの1番から15番、こちら中西夏之の作品です。中西は当館で最初に個展を開催した日本人作家で、現在開催中の「MOTコレクション展」で特集展示を行っています。今回寄贈の申出のあった作品は、大きく分けると1991年から93年、そして最晩年の2013年から2016年のものになります。これらの作品群と15番のほうにあります制作に用いた筆やイーゼルなどの二次資料とともに、まとまって御寄贈のお申出がありましたので、1950年代から90年代までの当館で既に収蔵されている作品に加えて、今後の調査研究のために非常に重要なものとなります。

続きまして、16番から18番、山田正亮は当館の開館前に1961年と69年制作の水平に描かれたストライプを基調とした「Work」シリーズの油彩を2点収蔵しておりますが、今回個人コレクターの方からの寄贈のお申出により、候補に挙げさせていただいた3点は1956年、1960年、1987年の作品で、サイズとしては小さいながらも作品の多様な展開を感じさせることができるものになっており、当館の収蔵作品に加わることによって、山田が画業において一貫して探求してきた線や色彩、色面への関心というものをより効果的に示すものができると考えています。

続きまして19番、20番、菅木志雄の作品です。こちら当館では既に大型の立体および平面作品6点と写真作品8点を収蔵しています。平面、立体は主に東京都美術館時代の収蔵になっており、写真は2015年開催の当館での個展を契機に収蔵した作品です。今回、長年のコレクターの方からの寄贈のお申出によって和紙を支持体とした2点を候補にさせていただきます。どちらの作品も当館所蔵のものに対して小型であることで、展示、ほかの作品との組合せもしやすく、菅作品を紹介する機会を増やすことができるものと考えております。

続きまして22番、23番、土屋公雄の作品です。土屋は当館で1995年に開催された開館記念展の参加作家で、今回は作家御本人から2点の寄贈のお申出がありました。1点目は「不在」という作品で、金属のフレームに様々なパターンのガラスをはめ込んでつくられた家型の作品、もう一点は「あの時」というタイトルの柱時計を宙づりにした作品、それぞれ90年代、2000年代の作家のキャリアを代表する作品となっております。

続きまして、24番から87番、数は多いんですが、別紙のほうで収蔵候補作品一覧という資料の中に、それぞれ作品の画像と詳細を添付しておりますので、こちら併せて御確認いただければと思います。

吉田哲也は1990年の初個展以来、ミニマルアートの大型作品を発表してきましたが、その後、机の上で制作できる小型の彫刻へと転換して、トタンや針金、石膏などの日常に

ありふれた素材を曲げたり折ったりねじったりという単純な作業の中で作品をつくるようになりました。当館でも1998年の第1回の「MOTアニュアル展 ひそやかなラディカリズム」に出展するなどのゆかりのある作家となっております。注目されておりましたが、2005年に40歳の若さで亡くなられております。今回寄贈の申出があり、計64点、こちらが候補になっております。

続きまして、88番から91番、そして92番から97番、こちら福田尚代の2つのシリーズの作品になっております。当館では2014年に「MOTアニュアル」に参加したことを契機に、書物を素材とした作品25点と絵画1点ほか計31点を所蔵しております。今回この2シリーズ合計10点の寄贈の申出が所蔵者よりありました。

最初の88番から91番は、岩波文庫のカバーが長い年月をかけて日に焼けて表紙に印刷されたタイトルが写し取られたという作品。92番から97番、こちら原稿用紙の升目を切り抜いて、それを窓と表現してつくられた作品。どちらも言葉とイメージに関心を寄せた非常に私的な作家の傾向を表すものです。

続きまして98番、ヒーメン・チョンはマレーシア生まれのシンガポール在住の作家で、こちら今年度の30周年記念展の出品作家です。新収蔵となります。近年撮影した200枚の写真と既製の掲示板から構成される作品です。展示されたときには毎日、この作品を鑑賞する最初の人、この200枚の中から2枚を選んで展示してということで展示が成立する作品です。個人的理由で選ばれた2点が、ほかの鑑賞者にとっては別のイメージになり得るという解釈を広げることができる作品です。

続きまして、105番から108番、松井えり菜は既収蔵の作家で、昨年度2点作品を購入した作家ですが、今回は個人コレクターの方から寄贈のお申出があり、2007年にギャラリーでの初個展で展示された作品となります。当館の収蔵作品が2023年の作品になりますので、作家の最初期の作成として、コレクションを補うという非常に貴重な作品となります。現在、コレクション展にも出品させていただいている作品もありますので、後ほど御覧いただきたいと思います。

続きまして、110番から113番、エキソニモです。こちらの4点はコレクターの方から寄贈のお申出があった作品です。エキソニモは男性と女性の2人から成るユニットで、インターネットの黎明期から活動を始めて、ソフトウェア、データサービス、流通の仕組みを素材として日本のメディアアートを代表するユニットになっております。数年前に多く話題になったNFTを用いた作品などの寄贈のお申出がありました。インターネット上に作品の証明書がひもづいた形態の作品として、今後美術史の流れを語っていく上でも、その一つの参照になってくるであろうという作品になります。

続きまして、114番から116番、高田冬彦、こちらも新収蔵の作家で、同じくコレクターの方から寄贈のお申出があった作品です。高田は1987年生まれで寓話性とユーモアを備えた映像表現によって性的欲望や親密さに言及し、固定化された男らしさや共同性の在り方について異議を唱える作品で知られています。近年、既存の文化をクィア的観点から読替

えるという潮流においても注目を集めております。今回、事前に映像のリンクを送らせていただいた代表作である２点の映像作品と、その関連作品の寄贈となります。

117番から118番、藤倉麻子は1992年生まれ、新収蔵の作家になります。都市や郊外を横断的に整備するインフラストラクチャーや、それに付随する風景の奥行きに注目して、3DCGアニメーションの手法を用いた作品を制作しています。近年は建築分野でヴェネチア・ビエンナーレの建築展の日本代表に選ばれるなど注目を集めており、デジタルと現実世界の接点を浮かび上がらせる現代性ととも、現在最も評価すべき若手作家の１人です。

以上が今回の概略となります。詳細は引き続き作品を実見しながらお話しさせていただければと思います。よろしくお願いいたします。

以上です。

富田委員長：大変たくさんさんの作品の御説明がございました。

何か御質問、御意見、この段階でございますでしょうか。

では、これから作品の実見を行いたいと思います。よろしくお願いいたします。

(委員離席)

(作品実見)

(委員着席)

富田委員長：長時間にわたり、御説明どうもありがとうございました。

作品を御覧になって何か御質問ございますでしょうか。御質問される際は、作品番号と作品名を指定してから御質問ください。

児島委員、お願いします。

児島委員：シンガポールの作家さんの作品がありましたね。前はこちらではアジア関連の展覧会とかもされていたと思うのですけれども、あまり最近そういうアジアの展覧会とか作品の収蔵というのがなかったのかなと思うのです。今後もう少し機会があれば増やしていくとか何か方針があれば教えていただければと思います。

關次事業企画課長：展覧会に関わる企画のことですよね。

児島委員：展覧会もですが、収蔵で。

石川事業係長：展覧会としましては、海外の作家の参加する企画展等も今後も検討しております。その中で機会があれば、特に今回海外の作家の収蔵というのが寄贈の１点のみということもありましたので、やはり輸送費であったりとか、作品の円が弱いという部分もあるので、状況を見ながらという形にはなりますが、企画展に関連してなども今後も機会はあるかと思っておりますので、そういった部分も念頭に入れて収集のほうは進めたいと思っています。

児島委員：ありがとうございます。

富田委員長：ほかいかがでしょうか。よろしいですか。

では、意見交換に移りたいと思います。

まず、先に評価表の記入をしていただきたいと思います。評価方法等について、事務局

から説明をお願いいたします。

大石文化施設担当課長代理：作品の評価方法について御説明させていただきます。

お手元にごございます評価表を御覧ください。

評価表には今回の収集候補作品が一覧で記載されております。作品ごとにA、B、Cの3段階で評価していただきます。Aは「収蔵すべきである」、Bは「収蔵してよい」、Cは「再検討を要する」という評価になります。A B Cいずれかに○をつけていただきます。

委員の皆様の御記入後、評価表を回収させていただき、事務局で確認させていただきます。

評価方法の説明については以上です。

なお、確認の結果、C評価がついた作品があった場合、後ほど理由をお伺いできればと思います。

富田委員長：記入方法について何か御質問ございますか。よろしいでしょうか。

では、御記入をお願いいたします。

(委員 評価表記入)

富田委員長：委員の皆様から総評を一言ずついただければと思います。

では、今日は青野委員からお願いできますか。

青野委員：結構な物量でちょっと忙しかったんですけども、非常にバリエーションに富んだものを拝見できて、私自身も楽しんで見させていただきました。

ただ、先ほど児島先生のほうからもお話があったように、アジアをはじめとする海外の作品が少ない、という点が私も気になっておりまして、それが少し残念な点であったようにも思います。

あとは皆さんいろいろ御意見おありだと思いますので、取りあえずここまでにしておきます。

富田委員長：大谷委員、お願いします。

大谷委員：どうもありがとうございました。大変私もいろいろな作品を見せていただいて勉強になりました。

本当は一点一点もう少しじっくり拝見する時間が欲しいというのが正直ございましたので、今後時間の設定とか御検討されたらいいのかなというふうに思いました。やっぱりこちらもある立場で評価させていただきますので、きちんと確認した上で評価させていただきたいと思うので、その辺りは今後御配慮いただければと思います。

あと作品としては本当に「MOTアニュアル」みたいな企画展のリサーチに基づいて収集されているのもあれば、とても大事な作家だけれども今まで案外公立美術館に入っていなかった作家をいい具合に、伊藤さんもそうですし、それから伊藤さんも本当にキャリアの長い方なのに公立美術館に入っているところが本当に限られちゃって意外だなと思っていたのが、これだけまとまった数入ったのはとてもよかったと思いますし、あとは私は個人的には吉田さんが昔からずっと気になる方だったのが、ようやく安住の地を得てと

てもよかったなというふうに思っています。

以上です。

富田委員長：ありがとうございます。

児島委員、お願いします。

児島委員：私も大変充実した購入、寄贈作品に出合えて、勉強になりました。いつも感心するのですが、学芸員の皆さんが非常に詳しい説明をしてくださって、やはりそれだけリサーチを重ねてこられたんだなということで、大変説得力があって勉強になります。

特に中西さんの御寄贈はすばらしいですし、今までの蓄積もあるのでいつでも個展ができてしまいそうな内容でした。

それから、斉藤陽子さんですね、こういう作品を収蔵できたのにも関心しました。今後、久保田さん、塩見さんの作品と組み合わせていい展示ができると思います。

伊藤誠さんについては、私も入っていなかったのが非常に意外でした。もしかすると、こちらができる頃がインスタレーションの時代だったので、保存しにくいような、その場で見ないと知ることができなかったような作品が、もうちょっとまだ漏れているのかもしれませんが。埋めていくことができるのであれば、今後もそういうほうもぜひお願いしたいと思います。ありがとうございます。

富田委員長：出原委員、お願いします。

出原委員：私が思ったのは、過去と現在の両方に目を向けて、現在のものも積極的に買いつつ、過去のものも買っていくという、この姿勢で収集されているというのはさすがだなと。私としても確かに吉田さんとか土屋さん、伊藤さん、こういった割と我々がよく見ていた作品が入るというのはとてもうれしいことです。伊藤さんに関しては僕も実際角度を変えると全然違って見える、ああいった作品がもし今後入っていけばとてもうれしいなという感じです。

それと、中西さんに関してはよく寄贈でこれが入るなど。土屋さんの「不在」というのも代表作で、あれは塩田元学芸部長さんが世田谷にいた頃に展示したんじゃないかな。

青野委員：そうです。世田谷美術館で出ていました。

出原委員：そういう意味では、ここ都現美に関係する意義があるという感じがしました。

本当に斉藤さんも含めて歴史的なものをちゃんと追っているというのは感心しましたし、現在の作家も私も益永さんとかすごく興味があるんですけども、そういう若い作家を入れているというのが面白いなと思いました。

「Fence」の作家、「Fence」って菅木志雄さんがフェンスに石ころを詰めたりした作品がありますよね。そういう意味では、ここ菅さんたくさん所蔵しているのでつながりがあるって面白いなと思いました。

いろんな読み解きがこの中でもできるぐらい多様性があると思ひまして感心いたしました。

以上です。

富田委員長：私もまず、購入に関しては世代とかジェンダーとか非常にバランスよく目配りされたセレクトされているなと思いました。

それから寄贈が大変多かったわけですが、これだけ御寄贈いただけるということは日頃のこの間の活動がやはり評価されているということだと思いますので、ぜひ今後も貴重な作品を御寄贈いただけるような活動を続けていっていただければなというふうに思います。

それから保存の難しそうな作品が幾つかありましたので、これは神経使うと思いますけれども、ぜひいろいろ修復の方なんかとも御相談しながら大切に保存を続けていただければというふうに思います。

これまでの意見交換を踏まえまして、評価表の内容を変更したいという方はいらっしゃいますでしょうか。よろしいですか。

富田委員長：ほかよろしいですか。

では、これをもちましてコレクション部会を終了いたします。

長時間にわたりまして、委員の皆様、ありがとうございました。

では、進行を事務局にお返しいたします。

大石文化施設担当課長代理：富田委員長、ありがとうございました。

冒頭に御説明させていただきましたが、お配りしました資料一式は回収いたしますので、机の上に置いたままにしていいただければと思います。

これをもちまして、令和7年度東京都現代美術館美術資料収蔵委員会コレクション部会を終了いたします。

委員の皆様、長時間にわたりまして本日はありがとうございました。

午後0時22分閉会

以上